

農業と太陽光発電 両立 広がるソーラーシェアリング



©市民エネルギーちば

農作物を育てる畑の上に太陽光パネルを設置し、農業と発電を両立する「ソーラーシェアリング」が広がっている。ソーラーシェアリングは、農機具メーカーで設計の仕事に携わった長島彬さんが考案。現在、国内2千カ所以上に

普及している。県内では、匝瑳市に大規模な発電施設がある。船橋の市民団体などで自然エネルギーの普及活動に取り組んだ東光弘さん(55)が代表を務

同社の発電所。太陽光パネルの下で大豆や小麦を栽培

める「市民エネルギーちば」が14年に運転を開始。誰でも参加できるパネルオーナー制で、耕作放棄地に施設を構えた。太陽光パネルの大きさや周辺設備は農作物や生態系に配慮。従来の常識にとらわれず、日の出から日没までまんべんなく受光するパネルや狭い農地でも効率よく発電できる両面受光細方パネル導入など、技術開発にも力を入れる。

地球温暖化、11年の原発事故など、エネルギーの在り方が問われる中、東さんは太陽光発電が日本にとって不可欠なものになると確信。しかし、野山を切り崩し、水脈を分断する「野立てメガソーラーは『死の土地』を生みかねない」。そんなとき、長島さんに出会いノウハウを学んだ。

仲間らと資本金90万円で立ち上げた同社は6年半で急成長。利益は自然エネルギーを中心とした環境活動に還元している。発電所は、成功事例として「聖地」と呼ばれ、全国から年間1500人以上の見学者を受け入れる。海外からの問い合わせも多い。温暖化対策に熱心な企業などと連携している。ソーラーシェアリングは、農家が売電でも収入を得られ、電気自動車の充電スポットなどとしても地域の暮らしに貢献できるもの。昨年12月、「自然エネルギーを広めるネットワークちば」が主催したセミナーで、東さんは「これから農業を目指す若者たちに新たな可能性を示す必要がある。大変な時代だが、ピンチはチャンス。根っこは広がっている。芽は一気に伸びる」と話した。